

会 小 牧 市 医 師 会  
医 師

佐々木 憲雄

## 眼の成人病について

どたなにも現れる眼の老化現象の一つに、小さな字が読みづらくなる老視（老眼）があります。個人差はありますが、四十歳前後から始まります。

読書や細かな仕事により眼痛、頭痛、肩こりなどが現れる人は、無理をせず近用メガネ（老眼鏡）を使用したほうがよいでしょう。また、老視は年齢とともに進行しますので、見づらく

### 老視は年齢とともに進行

なったらレンズを交換した方がよいでしょう。

次に白内障（しろそこひ）があります。

眼の中の水晶体（レンズ）が老化現象により白く濁り、かすんだ見え方になります。程度の差はありますが、五十歳代では約半分の人に現れます。点眼薬や内服薬で白内障を治すことはできませんが、進行を抑えるた

めに使用します。最終的には濁った水晶体を取り除き、人工水晶体を挿入する手術が現在一般的に行われており、他の疾患がなければ元の視力を回復することができます。

そして緑内障（あおそこひ）があります。

眼球内の水（房水）の流れが悪くなり視神経が圧迫され、物の見える範囲（視野）が狭くな

っていく病気です。急性の場合は視力低下、眼痛、頭痛、吐き気などが現れますが、慢性の場合は無症状のことが多く、手遅れになり失明に至ることがあります。失われた視野は点眼薬、内服薬そして手術によっても回復することはできませんので、いかに早く発見・治療して進行を防ぐかが、大変大事になってきます。

最後に糖尿病性網膜症、高血圧性網膜症についてです。

糖尿病や高血圧によって、眼底にもいろいろな変化が現れてきます。最初は無症状ですので、大きな出血などにより物が見づらくなり始めて気がつくことが多く、手遅れになり失明に至ることがあります。血糖や血圧のコントロールと眼底の定期検査が大変大事になってきます。

以上のように、いろいろな眼の成人病が現れてきます。眼の定期検査に努め、明るい人生を送りたいものです。

お問合せは、苦小牧市医師会

電話 33-4720へ